
全速力先輩

どさんこ侍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全速力先輩

【Nコード】

N0933S

【作者名】

どさんこ侍

【あらすじ】

ごく普通の高二陸上部主将が、とある出来事をきっかけに二つの組織の抗争に巻き込まれて・・・

全速力先輩 憂鬱（前書き）

ええと、前回間違ってこの小説を短編にしてしまった、どさんこ侍です

前回のサブタイトルは、全速力先輩 衝突 です

まあ、そんなこんなで物語スタートです

全速力先輩 憂鬱

夜風を入れるために開けた窓から差し込む月の明かりが眩しい

現在時刻、午後11時

二人組から貰った少女の写真を見ながら、俺は同じく貰ったSDカードを愛機の某有名携帯ゲーム機（折りたたみ式の二画面のやつではない）にそれを差込み、その内容を聞き流す

「……であるからして、私達ダノンは、超能力および魔力保持者の不当な監禁、拘束を解き社会の復帰を促す……くどくどく

一体何巡したか分からない

それに、殆どの情報は最初の一巡か二巡で覚えてしまった

3

ちなみに分かった事は、さっき俺にぶつかった連中はこのSDカード曰く、政府直属の非公開組織で勤めていて主な仕事内容は、超能力や魔術を持つ人たちのサポート活動だそうだ

そしてその中には俺に頼まれた仕事のように、そういった能力を悪^{ちから}用しようとする人間から、

救出するという事も含まれている

正直言って信じられない

だって、超能力者に魔法使いだぜ？

殆どファンタジーの世界だよ

はあゝ

だんだんウトウトしてきた

寝転んでいたベッドの掛け布団をしっかりと掛けなおし、本格的に寝る体勢入る

何？勉強が出ているんじゃないかって？

ああ出ているとも

だがいきなり本来国民には、極秘であるはずの組織や情報を知らされてしまったら

そしてその組織の人間に超能力少女を救えなんて言われたら

少なくとも俺は、のんきに宿題なんかやってられるほど精神は強く無い

POPの電源を切りイヤフォンを取る

ケースにそれらを入れようとするが、突然来た眠気の波状攻撃で手元がおぼつかない

そしてケースのチャックを締め切らないうちに俺は、力尽きた

翌朝

激しい太陽光で俺は目覚めた

どうやら開けっ放しにしていた窓が原因のようだった

制服に着替え居間へ向かう

ドアを開けて居間へ入ると、ダイニングテーブルに座って朝食のトーストをかじっている妹がいた

「おはよう」

「うんおはよう」

妹、結^{ゆい}はいつもと変わらないあいさつをくれる

俺は、テーブルに着き冷めかけたトーストを口に運ぶ

なんとなく、テレビを見る

そこには、いつもと変わらないズー○イン・スーパーが放送されていた

そう、いつもとなんら変わりのない朝

まるで、昨日の事を忘れたかのように・・・

朝食を食べ終わり自室に忘れた学生鞆に取りに、俺は席を立った

ガチャリ　とここ最近になって建てつけが悪くなってきた部屋のドアが意外と大きく音立てて閉まる

あったあった　いつも机の脇に置いている鞆は、やはりいつもの所にあった

それを拾い上げて立ち上がる

ふと目を机の上にやった時一枚の写真が目に入った

それは、俺を今とは違う所へ連れて行ってくれるかも知れない少女の写真

おおっと危ない　こんなもん妹に見られたら絶対引かれる

俺は机の中に写真をしまい、ついでに上を軽く片付ける

壁に立てかけた時計を見るとまだ7時10分だ

登校時間までバリバリ余裕の裕ちゃんじゃん

ベッドに座り込むとミッションのために必要な少女の情報を暗記しようとしてPOPを起動させた

「・・・今回の奪還目標は若干17歳、レベル5の超能力を有している。名前は雨神リノ」

この部分をリピートし続ける

それ以外の情報は、あまり興味が無い

「雨神リノ雨神リノ雨神リノ雨神リノ雨神リノ雨神リノ雨神リノ雨神リノ雨神リノ雨神リノ」

ガッチャン！！！！

派手に戸をブチ開けて入ってくるのは、結だ

「おにいちゃん、返事してよ！！ 呼んでも全然答えてくれないんだから」

どうやら妹は、ドアの外から呼んでいたらしいのだが精神集中して

いた俺には聞こえていなかった

でも怒鳴るのはやめて欲しい 情報が頭から抜けていく

あくまでゲームをやっていた雰囲気を作って俺は、立ち上がる

「もう!!」

妹はだいぶ苛立っているようだ

「なんだよ」

「あのさあ、いつも言ってるでしょ?! 制服脱ぐときポケットに小銭入れないでって」

彼女が言っているのは、多分昨日自販機でサイダーを買ったときのお釣ることだろう
別に気にしなくてもいいのに

「ハイハイ、今度から気お付けますよ」

「つたかう!」

まだ言いたい事があるようだったが妹は、部屋から退散していった
まったく朝から騒がしい奴だ

時計を見る

7時半ちょい前

少し早いがもう学校行くか

全速力先輩 憂鬱（後書き）

前回、今回通して誤字脱字があつたら教えてください

全速力先輩 お電話です（前書き）

全速力先輩シリーズ第三弾です

全速力先輩 お電話です

そういえば、あの雨神リノってどこから奪還すればいいんだっけ？

こんな疑問が湧いたのは、俺が今日四時間目の授業で惰眠を貪っている時だった

やばい、こんな重大な事なんで今まで気づかなかつたんだ

俺、アホじゃん つか何でSDカードにその情報入れないんだよ

あつ、もう一つ気づいた

いつ奪還すればいいんだ？

クソ、あの組織馬鹿だ 俺はちゃんとこついう事が知りたいんだよ

もう、あの組織駄目だな

その時、突然響いたチャイムが脳内世界に行っていた俺を、現実世界に引き戻す

時計を見るとお昼の12時 昼飯の時間だ

「おいおいおいおいおい、暁、屋上でメシ食おうぜ」

コンビ二弁当の入った袋を振り回しながら、友人の宇和圭吾（うわけいご）が俺の机に小走りに寄る

その後ろには、同じく友人の上也（かみやみお）、鈴木龍之介（すずきりゅうのすけ）、寅森次郎（とらもりじろう）、各々の昼食を持って待っていた

「おう！」

俺も机の脇に引っ掛けておいた、妹お手製の弁当を抱えて立ち上がった

「クソ、リア充め」

忌々しげに、俺と弁当を睨みつけながらパンを食べる次郎

「仕方ないじゃないの寅、あっちゃんとは妹さんと二人暮らしなんだから」

「二人暮らしだなんて、このリア充が」

漣のフォローに耳を貸さず、次郎は俺を睨む

まったく、次郎の妹願望、いい加減にしてくれよ

俺だって好きで二人暮らししてるわけじゃないんだ

目に付いた弁当に入っていたミニトマトをつまむ

甘みと少しきつい酸味が口の中で広がった

今、俺達は屋上の一角を陣取って、小昼食会を開いている所

メンバーは、さっき紹介した通りだ

これもいつもと変わらない

それはそうとさっきの話に出てきたが、俺は今妹と二人暮らしをしている

親は、一応いるが母だけだ

そしてその母も公務員の仕事で、今は東京の方に出向いている

それでも生活が破綻しないのは、家事ができる有能な妹がいるという事に他ならない

ともかく、他人とは少し違^{ひと}うが俺は今の生活を満喫しているのだ

「どーしたー？いきてるかー」

龍之介がこっちを覗き込む

「お、おう」

俺は、およそ半分残っていた弁当の中身を一気にかき込み自身の健在をアピールした

空が蒼い

ふと仰ぎ見た六月の空に思わず、こんな感想が出てきた

「前見ろ、暁！！」

「へっ？」

ぼんやりと空を眺めていた俺に飛ぶ次郎の叫び

だが、過ぎた時間という物は一生取り戻せないものである

そしてこの時、俺はそれを痛感した

ファサリ、小さな音を立ててコンビニ袋の中に空気を入れて風船状

にしたもの（俺達ではそれをバレーボールと呼称）がコンクリートに落ちる

「よし二点目リード」

屋上を横切っているほぼ直線のひび割れ（俺達ではそれをネットと呼称）の向こうで高らかに龍之介が叫んだ

「クソ、お前のせいで」

「すまん」

俺は、平謝る

そう、昼食を終えた俺達は、バレーボールしているのだ。

でも、食った後すぐに激しい運動をするのは流石にツライものがある

「チクショー、スパイク行くぞっ うらっ！！」

だが勢いよく振った彼の手は、空中に放ったコンビニぶく・・・じやなくてボールをパンという小気味の良い音と共に無残なビニール片へと変貌させた

ビミョーな空気が発生する

丁度よいタイミングで昼休みの終了を告げるチャイムが鳴った

「.....」

俺を含め、その場でバレボをやっていた四人全員が黙る

「じゃあも、戻りましょうか」

澪の、明るい声と共に俺らはゾロゾロと屋上を後にした

現在、本日五時間目の授業絶賛開催中!!!

俺を含め、クラス全員がほぼ授業を聞き流している状態だ

嗚呼、だりー

ふと、横目で隣の席の奴を見ると机に突っ伏してかすかな寝息を立てている

とたんに眠くなってきた……

うつらうつら、寝入りばなの心地よい俺のひとは突然の校内放送

によつてかき消された

「ピンポンパンポン　二年二組月下暁君は、至急校長室まで来なさい――以上　ピンポンパンポン」

見ると、教室中のクラスメイトが俺の事をガン見している

後ろにいた友人は、小声でどうした？と聞いてくる

しらねーよ、て言うか俺が教えて欲しいくらいだよ

ともかく、行つて見ないと分からない

俺は、小走りに教室を出た

校長室の前に着くと、扉の前に校長が立っていた

「暁君、中に入りたまえ　総理大臣からお電話が来ている」

「！！！！！！？？？？？？」

全速力先輩 お電話です（後書き）

誤字脱字があつたら教えてください

全速力先輩 正式な作戦内容を受け取る（前書き）

おとといの地震凄かったですね
学校休みになりました
と、いうわけで第四話です
どうぞ

全速力先輩 正式な作戦内容を受け取る

「はい、お電話変わりました、月下です」

俺は、校長室の電話の受話器を耳にあて、応じた

「すみません、授業中に」

そこから、たまにテレビで見る総理大臣、すがわらなおひと菅原尚人の声が聞こえた

「い、いえ」

やべー緊張する、よくテレビとか見ていて総理大臣に政治のやり方とかをタメ口でボロクソ批判するときあるけど、それはテレビで相手には声が聞こえないからで、やっぱりいいのか？一対一で話をするとなるとスゲー緊張する

「・・・あの？もしもし？聞こえていますか？もしもーし？」

「へ？あ、はい聞こえています すみませんちょっと緊張してしまっ

もう、こればかりは誤魔化しようが無い 仕方ない、聞いていなかった所をもう一回話してもらおう

「べ、べつにそんなに緊張しなくても、リラックスしましょう？」

「ハイ・・・」

反省、少し冷静になろう

「あの、私はダノンの創立者兼代表の菅原です 今から雨神リノさんの奪還作戦の件についての詳細を話したいのですが、なにかメモできる様な物が有ったらメモしてくれば幸いです」

「えっと、」

へー総理、そんな事もやってたんだ

っとそんな事より俺は、適当にこの電話機が置いてある校長の机の上を漁る

すると、結構簡単に目当ての物を見つけ事ができた

「あ、え、あのお話、始めてください」

やや、ぎこちないがさっきよりも、リラックスして話す事ができた

「まず、作戦開始の日時ですが、明後日六月二十二日の午前二時をを予定しています」

妙に豪華な金のメッキが入ったボールペンで素早くメモる

「場所は、あなたが今暮らしている、高野県末広市の市役所」

再度メモする

「奪還目標の居場所は、役所の最下層、地下二階の奥から数えて二列目のB-5の部屋、その前には役所の職員が常時見張りをしている模様、そして彼ら闇ルートで入手した銃器を装備しています」

んん？何か引つかかるぞ？
を持っていくということだ

つてえつつー！！！！！！

「月下さん？どうしました？月下さん？」

どうやら俺の叫びは、心で叫んだのではなく現実で叫んでいたようだ

「い、いえちょっと取り乱してしまいました すいません続けて下さい」

俺の謝罪に丁寧に応じる総理、いい人だ

「で、では、一応浸入ルートも構築してありますが、細かいトラブルはそちらの方で対処してくださいあと、書類を速達で郵送して置きましたので、多分今夜中には、着くと思います」「

メモった意味無くな？ チラッとそんな考えが頭をもたげたが、まあ忘れよう

「「なお、職員の中には我々を敵視する組織エンペラーの人間もいるため、妨害活動があつた場合はあなたの実力で排除してもらいます よろしいですね？」」

うゝん突っ込み所が多すぎるぞ
まあハイと答えておこう

所で俺には、気になることがある。この機会に聞いてみるとするか。

「ところで、総理一ついいですか？」

「はい」

「あの、雨神さんを奪還した後つてどこに行けばいいんですか」

俺は雨神リノとやらを救い出した後、当然そのダノンの職員が関係者辺りに保護されるなあと思当をつけていた
今それを聞いたのはあくまでも確認のためである

だが、返ってきた答えは俺の予想をことごとく打ち砕くものだった

「奪還後の動向という事ですな」

「まあそんなところですね」

うん、だんだん俺タメ口になってきた！

「えーつとですね、まだ来ていないと思いますが書類に書かれている脱出経路を通って市役所を出た後
月下くん、あなたの家に行きます　そしてそのままそこで暮らしてもらいます」

国語　設問１

今の言葉に間違いがあります。間違った部分に線を引きなさい

今がもし、国語のテスト中でこんな問題が出されたとしたら、俺は

恐らくいや迷わず

（あなたの家に行きます　そしてそのままそこで暮らしてもらいます）

に、線を引くだろう

だが、現実には、国語の問題のようには行かなかった

「はい？」

「だから、書類に書かれてある脱出経路を」

「そこは知らないんです、後半です」

「後半？あなたの家に行って、暮らしてもらうのどこですか？」

そこオオつつ！！！！

「いきなり叫ばないでください」

総理の、叱咤が電話口に響くが知ったこっちゃ無い
つかダノンの人が保護するんじゃないの？

「私達がやっている保護はあくまで一時的なもので、一定期間が過ぎると養子になったり、親類やご家族に引き取られます　それに彼女は、家がもう敵勢力に知られているためこれまでの場所に
戻るのには得策ではありません　わかりますよね？」

微妙に有無を言わせない強い口調

「まあ、で、でも」

「「反論は、受け付けませんっーか今更変更できません」」

せめて、作戦を行う俺の言葉くらい取り入れてもいいと思うのだが

「「よろしいですね？」」

声色がもう、軽く脅迫の域に達している

流石ダノンの創立者にして代表、俺を強引に作戦に引き込んだブラツクな男たちにも貴方の教育が染み込んでいらっしやる
もう、YESと答えるしか道は無い

「「ありがとうございます」」

若干テンションが上がった声が電話口でも聞き取れる
まあ、いい なる様になれた

「「それでは、」」

「はい、それでは、」

ガチャリ、ツー ツー ツー

ツーが三回鳴った所で俺は、受話器を置いた

周りが少しうるさいと感じたのはこの時で、窓に近づき俺は開いた
ブラインドの隙間更にこじ開ける

見ると、校庭で運動部共（特に野球部）が声を張り上げて練習に励んでいた

行かなきゃなあ

俺は、殴り書きしたメモ用紙をポケットにねじ込み、少し荒らした机の上を整頓してから校長室を後にした

全速力先輩 正式な作戦内容を受け取る（後書き）

ルシファー（ブレラ機）の制作が大詰めを迎えております
あとビームキャノンを作るだけです
がんばります

誤字脱字があつたら教えてください

陸上は、0・1秒の差で勝敗が決する（前書き）

はい、近頃姿を見せなくなったださんご侍です。

いや、新学期で忙しくて最近書けないでした。

多分、これからもこんな調子になると思いますが宜しく願います。

それではどうぞ

陸上は、0・1秒の差で勝敗が決する

「よい、どん」

スタート用の赤い旗を勢い良く振り上げ、スターターの後輩の女子は叫ぶ

クラウチングスタートを基準にして自分の歩幅に調整した、スタブ口（正式名称スタンディングブロック）を思い切り蹴りだし俺は、走り出した

30mを知らせる白線が見えてくる

前に屈めた体をつい、反らしたくなる衝動が起きるが、30m白線までは体を反らすなという指導を先に受けているため持ちこたえる

白線ラインを越える

一気に上体を起こして更なる加速に入った

50mラインを、今越えた

短距離用のスパイクが、グラウンドの土を的確に捉え俺の脚力をほぼ100%スピードに変える

80m

風が、景色が、いつもの倍の速さで流れていく
ゴールは目前だ

そして

「うがつ!!!」

最後の一かけらの力をも出し切って、ゴールの100mラインを越えた

「10秒92!、先輩!!新記録です」

記録係の後輩がストップウォッチ俺に突き出し見せつけた

その文字盤には、確かに10・92の文字

は、出ました新記録!!!!!!

俺は、記録係の後輩に礼を言ってグラウンド横の運動部用の倉庫の水飲み場に向かって歩き出した

さあ、勝利の美酒と行こうか!!!

総理の指令を受け取ってから、二時間

俺は、俺が所属する陸上部に出向いていた

例の奪還作戦は今の所、最重要&一番悩ませる案件なのだが、走っ

ている時は無意識のうちに考えないようにしている

それはそれで良いと思っているし、変えようとも思わない

部活のときは、本気でやろうと考えている

まあ、いい

蛇口の前に立つ

栓を捻ると、ダバダバと水が溢れ出た

水を口をつけると、冷たい液体が喉を通って行く感覚がある

火照った身体が、急激に冷めていく

「はあ~~~~」

今、俺は何とも言えない感覚に浸っていた

熱いような、気持ち良いような、もっと別の言い方で表すと、高揚感というべきか

なんとなく、空を見上げた

夕方の空は、赤く燃えていた

ふと、左腕につけた腕時計を見るともう、六時半
部活を終了してよい頃だろう

俺は、グラウンドに戻り、大声で部員たちに撤収を呼びかけた

そして、部員たちと顧問の教師を集め数十分間のミーティングの後解散した

さっきよりも、薄暗くなった校門の前を歩きながらポケットに手を突っ込む

違和感があった

手で触ってみるに、どうやら紙のようだ

引っ張り出してみると、それは総理大臣との電話の時走り書きしたメモだった

暇つぶしに目で追うと、その殆どがさっきの電話の内容ばかりだ
つまんないと思いつつ、目で追っていくとメモ用紙の下の方に来る
そして気づいた

” 作戦に必要な装備は、作戦実行者が用意する? ” という一文に

「はあゝ! ?」

俺は、本日何度目かの叫びを上げた

さっき、100mを計ったときスターターを担当した後輩の女子が、こちらを怪訝眼差しを向けるが知ったこっちゃ無い

しかし、俺は考える

しかし、あの組織はどこまで何の罪の無い一介の高校生なんかを組織間抗争に招いたんだろうね？

というか、銃を持った人間がいる所に民間人を放り込むんだよ！意味わからん！

だが、やると言った以上やるしかないんだよな

そして、頭が目の前の文に戻った

「武器か」

別に威張るわけでは無いが、俺はそういう武器関係（例えばエアガンとか）に興味を持ったことが一度も無い

だが

「心当たりはあるんだよな」

上を向いて、つぶやく

俺は、その心当たりに向かって歩き出した

腕時計を見ると、時刻は午後七時

それこそ、奴の家は俺の家と正反対なのだ
つかれるぜ

まあ、とにかく昼飯を誘っておきながら忽然と姿を消しやがった宇
和圭吾の家のチャームを押した

奴の親は共働きである事は知っている

だから、この時間帯には宇和一人しかいない

案の定出てきたのは圭吾だった

「えっ？ 暁？ どうした、こんな時間に」

「お、おう お前に用があつてな」

「俺？ ま、とにかく上がれや」

言われるままに、俺は圭吾の家に上がりこんだ

「おじゃまします」

階段を上がり、通されたのは奴の部屋だった

ここにくるのは、初めてじゃないしむしろ慣れているほうだ

そしてやはり、奴の趣味の一環で集められているモデルガンやら、自作ガンやら

原型を、留めているのはほぼ無い

そう、何を隠そう宇和圭吾の趣味は自作改造銃で遊ぶ事なのだからちろん本物ではないが

「何、ぼくとしてるんだ？いいからその辺に座れよ」

諭され、俺はテキトーにその場に座った

「今、なんか飲み物持ってくるわ」

「いや、別にいいよ」

そう、言いながらも圭吾の背中を見送る俺

ま、いいんだけどね

ボタンと閉まる扉

俺は、部屋を見回した

どの壁を銃、銃、銃だらけ

いつもは、呆れるのだが今日は違う

その時、圭吾が戻ってきた

「こんなもんでいいか？」

そういつて、五百ミリリットルの紙パックに入った「リンゴ黒酢」を放る

キャッチし、礼を述べ、付属のストローをパックに刺して吸った

粗方、中身が減った所で圭吾が話を切り出した

「んで、どーした？」

「んまあ、ちょっと、さあ、お願いがあるんだ」

「なんだ？」

「あのさ、銃を一つか二つ、要らないやつでいいんだ俺にukれないか、な？」

微妙に、静かな時間が流れる

そして時計の秒針が三回まわったところで、イキナリ「ぶふおあつ」
つと圭吾が吹いた

「あゝ、にらめっこ強えーな」

「いやいや、にらめっこじゃなくて俺の話を」

「分かってる、銃欲しいんだろ？」

「ああ、」

「それじゃあ、」

その時、奴の眼が文字通り変わった

それからたつぷり一時間ほど、本気になった圭吾の銃選びに付き合
って、曰く持ち運びに一番目立たない
ギター型ライフル（ギターケース付き）と側面に白く修正ペンで「
とかれふ」と書かれたハンドガン型の

謎の改造銃を、一万数千円と引き換えにGETした。

なんか無駄な買い物したな

家への帰路になんとかそう思った

陸上は、0・1秒の差で勝敗が決する（後書き）

突然ですが次回予告めいたものを
次回全速力先輩

「雨神リノ奪還作戦」
それじゃあ皆、あでいおす!!!

雨神リノ奪還作戦（直前）

「「なんで、私の思っている事が分かるの？」」

本気で気味悪がってヒステリックに陥っている、声色が私の鼓膜を刺す

「「いやだ、近づかないで、気持ち悪い！！！」」

実の母言われたこの一言に、幼かった『私』の心はまるで鋭利な刃物で何度も斬りつけられたかのように、傷ついた。

うずくまって、泣いて居ても、母は汚物を見るような視線を投げかけている。

悲しかった、嫌だった

だから、この時から私は私自身の心を、出来るだけ押し殺そうと決めた

あの時の事は、17になった今でも深く心に刻まれている

ぐにやりと視界が歪んで場面が変わった、多分中学2、3年生の頃
教室の隅に追いやられて、さっきより成長した『私』は泣いていた

そして周りには、同級生たち

その眼差しは、侮蔑、軽蔑、様々だが共通しているのは、皆私の事を傷つけるのをなんとも思っていないという事だった

思わず、視線を逸らす

瞬間、一番近くに立って居た生徒が目の前の『私』に、持っていた飲みかけの牛乳を投げつけた

中身のほぼ全てが、『私』に降りかかる

「あれあれ？雨神さん、どうしたの？そんなに牛乳浴びちゃつてえ」

挑発するように、『私』に罵声をかける

だが、なにも言い返せない

もうこのクラスは『私』を苛める事が当たり前なのだから

言い返したら、皆に牙を剥かれる

怖くて、怖くて、学校が嫌で、何もかも嫌で

「そういえば、雨神って牛乳を浴びるのが大好きらしいよ」

茶化すように女子生徒は、あられも無いことを言う

「じゃあ、手伝ってあげるか！……」

と、男子生徒が言うと次々と牛乳を持っていた生徒がパックを開けて『私』にダバダバとかけて来た。

「辞めて、お願いだからっ！」

「「はあ？何を言っているのぉ？ 分からないなあ」」

『私』の訴えも虚しく、クラスメイトたちは自分の分の牛乳では飽き足らず、余っていた生徒の物までかけて来る。

そして、全てがかけ終わった時『私』は、泣く涙さえも枯れ途方に暮れていた

何で、私にだけこんな事をするのだろう

何で、私にはそんな事が出来るのだろう

答えは一つだ

雨雨神の神龍の力を持っているからだ

ギシリ、と恐らく何処かの病院かその系統の施設で手に入れたと思われるベッドが寝返りを打った時に、小さく音を立てた。

側面は、牢屋のような格子戸がはめられ室内が丸見えの地下二階

壁に掛けられた時計は、午後十一時を指している

先日、学校帰りに謎の一团にさらわれてから今日で約三日が経った

その三日目の夜、どうやら悪い夢を見ていたようだ

目元を拭うと、指が濡れる

私は、泣いていた

どんな内容は覚えてないがかは分からないが、多分苛められていた頃の夢だろう

「もう、嫌だ」

きつく、瞼を閉じると涙がまた溢れた

教室棟、二階トイレ個室　二時間目と三時間目の休み時間

俺は、今日いや明日の雨神リノ奪還作戦についての書類の茶封筒を開封した所だった

えっつと何々？クリップで十枚前後に留められているコピー紙が二束、クリアファイル入りの写真が十数枚、最後にSDカードが一個

あゝ、なんだ、内容があっさりしてるね

まあ、そんな物なんだけどサ

そして、クリアファイルを漁ろうとした時、運悪く休み時間終了のチャイムが鳴りやがった

結構、乱雑に中身を広げてしまったもんで、仕舞うのに意外と手こずる

「このままだと授業遅れるな、ああ　言い訳どうしよう」

結局、授業に遅れた言い訳を考えることができずその時間が終わった後、たつぷり先生にしばらく早数時間

午後の授業はもっぱら睡眠に宛て、内容なんて聞いちゃ居なかった
そして、午後四時半

いつもと変わらず部活に励む部員たち（但し、少数！他にも部員は居るがそいつ等は欠席か、ベンチに座ってサボってる）

ダメもとでサボり組に声を掛けながら、練習練習！！！！

やっぱ、何事にも練習は大切だよネ！

とか後輩に講釈垂れていたら、来週大会があることを思い出した

でも、ほんの数時間後に控えてある例の作戦も頭に浮上して来てなんかテンション下がった

「寝るなーーーーっ！！！！」

心臓が一瞬止まりそうになったのと、この声が妹結ゆいの物であることを理解したのはほぼ同時で、しかも体が条件反射で、正座をし妹に平

謝りしていた

我ながら情けないぜっ！！！！

とか決めるのは、俺の勝手だがそんな事を言っても仕方無いだろうとも思う

ちなみに、先日の朝のように何でまた怒られていたのかというと、部活から帰って書類を見るために部屋に直行 ベッドに寝ながら資料を見る 眠りに落ちる、まあ、文にするとこんな感じで、『眠りに落ちる』の段階で妹は夕食を俺と食べるために居間で待っていた
そして、なかなか来ない俺に痺れを切らしてマイルーム強制搜索に至った訳だ

「兄思いの、いい妹を持ったもんだなあ」

その放言の直後、脳天に結の踵が降って来た

午前一時五十分

「来る！」

私は、直感した

頭の中になだれ込んでくるこの感覚は、まさしく私の能力の一つである時読みによるものだ

時読みとは、世間で言う予知能力に分類される物で、代々雨雨神の神龍
力を受け継ぐ雨神家でも発現する事が稀な力なのである

――助け、にクル、一人、少、年――

始めは、感覚的なことだが次第に言語を伴った情報のうねりになっ
て未来に起こることがはつきりと『見えて』来る

そして、今夜、というワードが提示された瞬間、自分の意思とは関
係なく全身の力が抜けた

時を越えた情報を得た時の代償である

ベッドの側面にぐったりともたれかかる

頭が鈍く強い痛みを訴え、狂ったように汗が噴き出し、体の中が渴
いて行った

ちょっと、さっぱりしよう

ぐったりと力が入らない体を起こし、出されてある着替えを持って
隣の部屋にあるシャワールームに向かった

「はい、午前一時五十分になりました。どうも、改めまして月下しげしげ曉かつきです」

現在私は、市役所近くのコンビニに居ます！！！」

リポーターみたいなナレーションをしてみたが、誰も聞いて居ないしなんか悲しくなってきたので辞めよう

一応、さっきのリポートの通り、コンビニに居る

ガムと毎週買っている「少年ジャ○プ」の今週分をしっかりと購入しているため、だらだら店に居る俺に店員も文句は言えないはずだ（たぶん）

というか、店員よりも警察の人とかに補導されそうですごく怖い

まあ、そんな事はどうでもいいんだ、後もう数分で作戦が始まるのだから

おっと、腕時計を見ると、もう五分も経過している

さっき発見して目をつけていた、かんしゃく玉二十個入りを八袋と爆竹を一箱、百円ライターを手にとって、会計に運ぶ

かんしゃく玉はもう少し欲しかった

大方、どっかの悪ガキが悪戯のためにでも購入したのだろう

チクシヨウ!!!

なんて思っていたら、会計が終わっていた

代金は、ぴったり渡したからお釣りは無い

作戦中にジャラジャラ鳴って敵に見つかるような事になるのは避けたいからな

店を出ると、ひんやりとした涼しい空気が俺を歓迎してくれて、悩んだ結果の夏服の半袖だった俺は鳥肌が立った

店の脇に止めた自転車の所に駆け寄り、戦闘準備を始めた

まず、ジャップを制服のズボンに差込みベルトで固定

これで簡易式対刃物対策は完璧だ

続いて、宇和から買い取ったとかれふをギターライフルのケースから取り出しポケットに仕舞いこむ

そして、さっき買った爆竹とかんしゃく玉五袋を開けたままのケースに入れる

かんしゃく玉の残りはポケットへ

準備完了だ

午前二時まであと、二分

ちょっとクールダウンと、持ってきた写真を眺めた

多分、学生証の証明写真を撮ったときのものだろう

制服を着て、きりつとした表情をこちらに向けている

特徴的なのは、写る少女の髪と瞳が薄い水色で綺麗なのと、少女が可愛すぎるという事だろう

この写真を見なければ俺は、今の作戦を断っていただろうと思う

いわゆる、運命の写真って奴だ

にしても、可愛いな雨神リノ

ぐっふえっふえっふえっふえっ

嗚呼、ロー○ンの店員の視線が痛い

午前二時、デジタルの腕時計がピピピと、電子音を奏でる

さあ、作戦開始だ！

雨神リノ奪還作戦（直前）（後書き）

え〜っと

ど、どうでしたか？

少し怖いです。

誤字脱字があつたらお知らせください。

雨神リノ奪還作戦（前） ギー○に首ったけ（前書き）

はい、数ヶ月ぶりですね
どさんこ侍です
奪還作戦です！！
それではどうぞ

雨神リノ奪還作戦（前） ギー〇に首ったけ

コピー用紙に印刷してある建物地下までの地図を見ながら、俺は市役所別館の南側排水ダクト付近に着いた

「えーっとコイツが入り口か？」

だが、ダクトとは名ばかりの、実際は錆びて朽ち果てる寸前の縦横約一メートル金網がそこにあつた。

うーん、なんかこう中に蜘蛛の巣やら得体の知れない紫色の液体が流れていたりして、スゲー入りにくい

というか、入りたくない

でもなあ、

しゃーない、行くか

ガボッと金網を外し、頭を突っ込んでみる

中は勿論真っ暗

どんな匂いともつかない異臭が鼻をつき、思わず顔をしかめる

ついでに、蜘蛛の巣も顔にかかりこの上なく気持ちが悪い

埃に噎せながら顔を出す

「ナンダヨコイツアー、ナメテンノカヨ―」

そんな状況だった

何か使える物がないかとギターケースを漁ると、底から冊子のような物が出てきた

（け〇おん楽譜集パート1：〇―太に首ったけ）

「ふうんあいつ、けいお〇好きだったんだ」

楽譜を丸め、棒のようにして握りダクトにもう一度突入を試みた

「げほっ、おほっ」

楽譜を振って、蜘蛛巣や虫を払いながらダクトを進むと、学校の教室くらいの大きさの空間出た

その中央には、コンクリで出来たちよい大きめの排水路があり中にはあまりキレイとはいえない水が流れている

異様に埃っぽくて湿気っぽい、臭いも凄い

手で口と鼻を覆いながら、唯一の光源であるペンライトを市役所の内部図に当てる

「うーん、合ってる、みたいだな」

図には、今さっき通った排水ダクト、現在地の恐らく排水溜めと、赤い矢印が貫いている

そしてその矢印は、ダクトを背にしたときの左側を指していた

矢印に素直に従って通風孔を進むと、行き止まりになった

図を見ると、「障壁破壊」の文字

目の前には、明らかに後付けされたような四隅をネジで止められた鉄板

「いいのか？ほんとにやっちゃって」

トビラでもないかと上下左右を見ってみるが、いずれもコンクリの壁しかない

鉄板を叩くと、カーンカーンと軽い音がする

板はネジも含めて全体的に錆びていた、そうたいして厚くは無いようだ

「そうと決まれば」

背負ったケースを下ろしホックを開け、宇和から買い取ったギターライフルを構える

ギターの胴は中央から端にかけて、黄色に近い茶色から焦げ茶色というグラデーションがかかっている

ネックは太めで、やや重い

何か見たことがあるなあと思うこのギターのネックの先の銃口を、ネジ近くの鉄板押し付け引き金を引いた

花火の火薬を使って強力化を図ったのだろう、マズルフラッシュが緑色だった

それを四隅ごとに二回程繰り返すと、銃声がかなり響いている事に気づいた

撃った弾は、どれも全弾命中の上貫通

さすが、零距离発射

音が静まらないうちに、俺は体勢を変えると右足を鉄板に向けちぢ込めた

そして、思い切り鉄板を蹴りつけた

ゴフン、という石でも蹴ったような音がこだまし、鉄板はあっさりと破け落ちた

そしてその先の空間を見て、驚いた

「これ、エレベーターじゃね？」

正確には、エレベーターシャフトなのだが、その上下ともに先が見えない空間に俺は、絶句した

再度地図を確認すると、どうやら今出た通風孔のすぐ脇に見えるハシゴを伝って、地下二階の通風孔に侵入する手順だった

おそろおそろ、ハシゴに乗り移り下り始める

今更ながらに、命綱の重要性を理解するがもう遅い

このまま、下り続けるしかないのだ

最悪な事に、ハシゴは錆び付いていて妙なぬめりを伴っている

下手をすれば、滑って落ちてこの体を地下二階の地面に叩きつけられる事になるだろう

「あゝっもっっ、怖えーっ」

十分と少しはかかっただろう、なんとかハシゴを下り終え、地下二階の通風孔の中を匍匐前進していた

今までの薄暗さとは対照的に、ここではダクトの隙間から漏れる電気の明かりが、人間の存在を感じさせる

「でも、みんな、敵なんだよな」

全身が、気だるさを発していることに気づかないフリをした

金属製のダクトを進んでいくと、空間の中の空気がだんだん生温い湿気を帯び始めた

正直キモイ

ま、そんな事は、どうでもいいんだけどね

と、割り切れないくらいに不快だった

「あゝっ、気持ち悪い」

叫びたいが、敵に見つかるかも知れないので小声に留めておく

さつき地図で確認したところ、そろそろ目的の部屋に着く位置らしい

更に数十メートル進むと、ダクトの床面には今までには無い四角い扉があった

先の鉄板のように四隅を留められている訳でもなく、取っ手が付いていていかにも扉という感覚があった

同時に、湿気による不快感も頂点に達していた

どうやら、湿気の発生源はこの下らしい

「ま、行つて見るかなあ」

取っ手を掴んで、上に引っ張って見る

鍵が掛けてある事を予想したが、それに反して扉はいとも簡単に開

き、やや力んで開けた為その反動で、俺は下に落ちた

なんか、妙にこれ湯気って言うのか？ それと、お湯で濡れた床がしりを湿らし、白熱球の暖かみのある光が妙にぼやけて、視界に映った

「えっ？」

意外と近い、上方向から何と表現すればいいのか、それはそれとはとても綺麗な声が聞こえた

雨神リノ奪還作戦（前） ギー○に首ったけ（後書き）

次回予告

雨神リノ奪還作戦（後）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0933s/>

全速力先輩

2011年10月8日15時45分発行